

# 美術科における教育実習の現状と問題点

美術科教育研究室 金子 一夫  
附属小学校 大和田 正人

## 美術科教育法担当の立場から

美術科における教育実習の制度的現状は、他学科と同様であるから特に説明する必要もないと思われる。それゆえ、ここでは美術科教育、図画工作科教育の実習に関する問題と、教育実習が美術科の授業に与える問題を考えてみたい。ただ、以下に述べる内容は美術科教官全体の意見ではなく、私（金子）個人の見解であることを記しておく。

教育実習は教育現場における教育事象を、実際に即して理解させることを目的にしている。当然、教科教育の理解も目的の重要な部分を占める。そして、その実習における問題点は美術科教育法をはじめとして、学部の授業のあり方に関してであろう。美術科の教科専門科目の多くは、製作実習を内容としている。それだけに美術専攻の学生は、製作の意義やその心理過程について自分なりに理解をしているはずである。しかし、それらを概念的に明確にし、美術一般や美術教育一般にまで考えを発展させるまでに至ってはいない。

教育実習後に提出された自由題のレポートなどを見ると、教育実習に行っただけで実技研究だけでは足りないものがあることに気がついたと書いている学生が少なくない。準備なしに教育実習に行ってしまったとか、何も知らない自分に気づいたと書く者もいる。よく読むと、それらは指導方法上の知識やコツを知らなかったというのではなく、もっと基本的な理念の不足、そこまで行かなくても理念を形づくる概念の不足を言いたいらしい。

このような感想が出てくる理由として、次のようなことが想像できるように思う。学部の実技の授業においては、作品を製作することと技法を習得することが目的であるから、あらたまって製作の意義や心理過程、作品の構造等を反省的に分析することはない。それをしたら、先の目的が達せられないこともあり得る。とにかく、作品をつくり、技法を習得して美術の何たるかを感覚的に了解しなければならない。しかし、感覚的に了解しただけでは、教育実習で生徒を前にしてそれを伝えることができるであろうか。一人ならともかく、多数の生徒に伝えるのは至難の技であろう。そこではじめて足りないものに気づくのである。また、自分が感覚的に了解しているものが、客観的に、伝える価値があるのであろうかという不安もある。学習指導要領がその不安を解消してくれるわけでもない。そこから美術教育の原理的なものを欲求するようになるのである。それらは実技研究だけでは得られないものである。以上のような現象が起っているように思われる。

美術教育の原理的な事柄に関しては、美術科教育法や図工教材研究で一応、学習することになっている。しかし、美術科教育法の方は教育実習と同じ第三年次で履習するので、受講の途中で実習に行き、美術科

教育法全体が終了した時には、実習も終わっているという状態である。それに何回かは実習で欠席しなくてはならない。できれば、美術科教育の全体を概観した後に実習をするのが、望ましいのではないかと思う。また、美術理論、特に近代美術、近代美学等の教養が、美術教育を考える上にも必要なのである。しかし十分に用意されているとは言えないのが現状である。

しかし、以上のような科目を履習した後に実習をしても、学生は実習でとまどいを感じないというわけにはいかないであろう。ただ、考えるのに必要な手がかりの量は、格段に多くなるのは予想できる。教科教育法をただ聞いただけでは、噛み合わない歯車をたくさん頭につめ込むようなものである。それらを噛み合わせ、まわすはずみをつけるインパクトがどうしても必要である。そのインパクトが教育実習であるとよいと思う。

美術科教育法と実技や美術理論の科目とでは、やはり実技及び美術理論科目が先行すべきであろう。ただ、教育学部の現状では美術を習得した後、美術教育の研究というわけにはいかず、両方を同時に習得するようにならざるを得ない。ただ、他専攻の学生の場合、図工教材研究の履習後に小学課程図工という現在の順序は、検討されてよいように思う。

さて、教育実習が美術科の授業に及ぼす問題にも触れておこう。美術科教育法については先に触れた通りである。一番問題になるのは小学課程図工であろう。受講しているのは美術専攻以外のさまざまな課程、科、学年の学生であるので、常に何人かが、入れ代わり立ち代わり実習に行っているのが現状である。他の小学課程科目でも同様であろう。小学課程図工の場合、授業の形態上、後から簡単に合流できない。そのため二部授業のような形態をとらざるを得なかったり、ある作業に必要な以上の時間がかかってしまうことがある。他の教官担当の小学課程図工でも、同じようである。何らかの対策を講ずることが望まれる。  
(金子)

## 附属小学校図工科担当の立場から

### 1 美術科の教育実習生の実態

附属小学校へ来る美術科の教育実習生は、各回5・6名であり、主に本校の図工科部員、常井、五島、片山、大和田の教室又は図工を受け持っている教室に1・2名ずつ配当になる。実習生は、この担当教官に図工教育の実習について指導を受けるわけだが、教科別研修などと同様、4人の教官にいろいろな点で指導を受けることが多い。美術科にかぎらず実習生は、まじめに指導や教材研究に取り組んでいるが、特に美術科の実習生の実態として他教科の実習生と異なる点がいくつかあるように思う。1つには、全体に大らかな性格の持ち主が多くいるようだ。実習も後半になるとかなりスケジュールが密になって来るので、休み時間なども指導案を書くのにいそがしいというのが実態だが、良く外に出て子ども達と遊んでいるし、子ども達も気持ちを見ぬいて気安く心を開いて来る。又大学で専門の指導を受けているため、物事を追求する方法や心がまえがある程度できており、教材研究や指導の本質的なところをおさえることができるようである。特に創造性にあふれた考えや行動は、子どもたちの意欲を盛り上げたり、興味を引きおこしたりするときなどにおおいに役だっている。

### 2 美術科の実習生の授業について

1枚の絵の受け取り方を例にとるとよくわかるが、一方の教師が良いと思っても、もう片方の教師はあまり感心しないということがよくあるように、図画工作科ほど教師の個性を強く打ち出す教科はあまりな

いと思う、実習生に図工の授業を行なわせるときでも、まず自分の専門性や考え、感じ方を大切にするように指導する。図画工作科の場合、カリキュラムを多少入れかえたりすることができるので、今までに取りあつかっていない内容で、アイデアのある題材を実習生が持っていれば、その題材を行なうことができるし、逆の面から言うと、教科書も指導書もないところで、文部省の学習指導要領のみをたよりに教材研究をしなければならないむずかしさもある。又新しい題材となる教材の準備が大変で、授業3日前からクラスの数分、紙を切ったり粘土を練ったりすることもある。こういったことをふまえた上で行なう実習生の授業は、次のようである。

- 子ども達に、図画工作は楽しいものなんだということを充分味わわせるよう、新しい題材を考えたり、準備を熱心にやっている。
- 楽しませようとするあまり、題材の目標を忘れてしまう。又楽しければいいという考えを持っている。
- 子どもの実態や作業能力を考えずに展開の時間配分をしてしまうので、終末の時に子ども達が終らず、しり切れの状態になってしまう。
- 教えることと、工夫させることの区別がつかず、想像させる授業で想像させなかったり、教えてしまえばすぐ次に進めるところを考えさせたりしてしまう。
- 導入のところなどで、子ども達の興味、意欲を盛り上げるのがうまい者が多い。
- 専門の領域の解釈は深いのが、それ以外の領域にまで広がっておらず、題材によって教材研究や指導に波がある。
- 論理的というよりは感覚的な指導をする。
- 子どもの作品、一つ一つを大切に、良いところを見つけようと努力している。

### 3 美術科の実習生に対する指導

実習生が図工室などで教材研究や準備をしている時、教科別研修会、一斉研究授業の反省会などで、教官と実習生が話し合いをするわけだが、話の内容としては、指導というよりも自分の過去の失敗談や、現在どこに苦勞しているかという例を中心に、楽しく行なわれることが多い。又なごやかな中も、実習生同志の評価や自分の授業に対する評価などは、かなりきびしい内容もあり、全体を通して話し合われたことをまとめてみると、図画工作科の指導から創造・情操教育まで幅広く行なわれている。指導の中心になる内容としては、次のようなものがある。

- 図画工作科における情操教育、創造性教育について。
- 目標のとらえかたと学習指導要領について。
- 子ども達にとって楽しい授業とはどのようなものなのか。
  - ・子どもの実態
  - ・目標のおさえ
  - ・意欲づけ
  - ・想のふくらませ方
  - ・想の定着のさせ方
  - ・評価・追求のさせ方
  - ・安全指導

#### 4 美術科生の実習に関する問題点と改善策

図画工作科の授業は、週に1度（2単位時間）しかない。2週間の実習中に学校行事が入っていたり、実習計画の示範授業などがあると、指導教官の授業を見ずに実習生が授業を行なうようになってしまう。時には授業も見ず、自分でも授業ができないでいて、斉研の授業を行なう実習生もあり、とても不安でしたという反省を聞いたこともあった。現在では、担任との話し合いで配当クラス以外の図画工作の授業を観察したり、図画工作の時間を特別作ってもらい、授業をするようにしているが、同じクラスに配当された実習生の教科内容によっては、それもできないことがある。又2週間という短い実習期間中にはじめて学校で生活する子ども達を見たり接したりして子どもを知り、授業を見たり行ったりして、図画工作での子どもの能力や生みだされた作品を知るわけであるが、それが指導に活かせるかどうかはかなり疑問である。せめて実習以前に、1・2度、図画工作の授業を見て話し合いをしておけば、実習生の考え、態度も異なってくるのではないだろうか。

以上のことから、今後の実習に望むことは、実習以前の段階で本校の図画工作科の授業を見て協議をするなどして、実際的な授業研究をするとともに、教育の現場にあった教材の研究をして行ければどうかということである。（大和田）